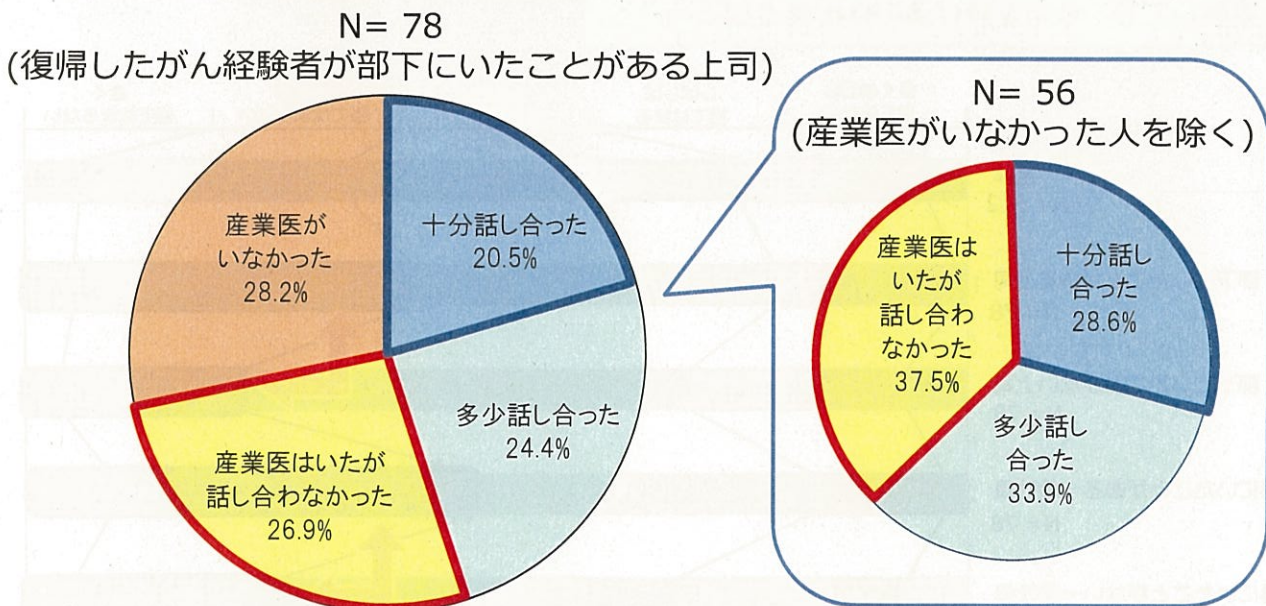


職場での がん経験者とのコミュニケーション調査

- 回答者：がん経験者が職場にいた経験のある人・ない人(男女)
- サンプル数：312名
- 調査方法：インターネット調査
- 調査実施期間：2012年12月12日(水)～12月14日(金)
- 割付条件：
 - ① がん経験者が職場にいたことの有無(過去10年) - 50 : 50
 - ② がん経験者との職場における関係
(がん経験者が職場にいたことがある場合)
 - ・ がん経験者が部下、もしくは上司/同僚 - 50 : 50
 (がん経験者が職場にいたことのない場合)
 - ・ 現在の職責(部下の有無) - 50 : 50
- 実施機関：株式会社 キャンサーズキャン
- 調査協力：キャンサー・ソリューションズ 株式会社
- 調査主体：アフラック

1

産業医との連携 部下が職場復帰するにあたり、産業医と話し合ったか

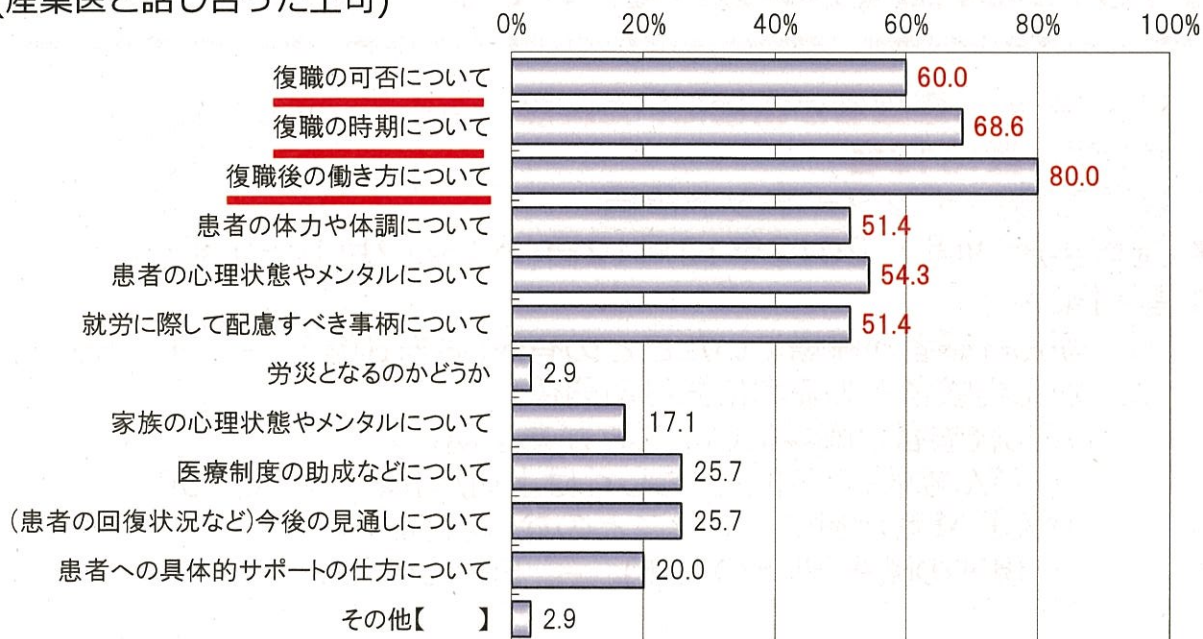


がん罹患した部下が職場に復帰するにあたり、産業医と十分に話し合ったのはわずか20.5%。一方、産業医がいたにも関わらず話し合わなかった上司は、26.9%にのぼった。産業医の活用の余地があると考えられる。ただし、産業医がいないとするケースについては、事業所規模が小さく、産業医がいない場合と、産業医がいても非常勤である、もしくは、存在が認識されていない、などの場合も考えられる。

2

N= 35

(産業医と話し合った上司)

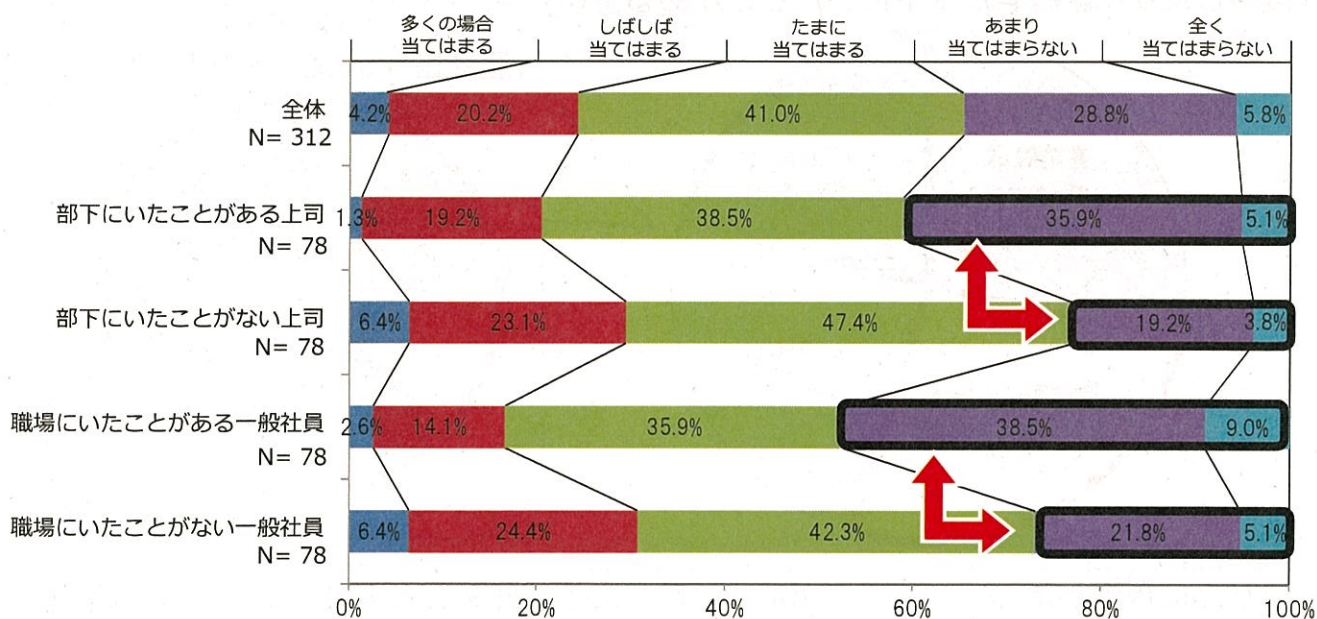


産業医と話し合った事柄としては、復職後の“働き方”や“時期”、そもそもの“復職の可否”についてが6~8割。
 また、“体力や体調”、“心理状態やメンタル”、“配慮すべき事柄”について相談する上司が相談者中、5割を超える様子が見て取れる。

理解/認識

がん経験者に対する認識と、職場でがん経験者と働いた経験①

復職しても、仕事を続けるのは困難となる



がん経験者と働いたことがある上司、及び一般社員は、“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に対して、「(あまり・全く)当てはまらない」と回答した率が高く(それぞれ、41.0%・47.5%)、職場でがん経験者と働いた経験がない上司(23.0%)・一般社員(26.9%)に比べて、大きく差がついた。